

## 歴史でわかる会計の全体像

### 経済の分岐点にいたルーベンスとフェルメール

今ちょうど上野の国立西洋美術館でルーベンス展、上野の森美術館でフェルメール展が開催されている。

ルーベンスが生まれたベルギーとフェルメールのオランダはスペインの支配下にあった。

スペインに反抗した北部ユトレヒト同盟がオランダとして独立し、ベルギーはスペインの支配地として残り、オランダはプロテスタント、ベルギーはカトリックの国となった。

ルーベンスとフェルメールの画風の違いだけではなく、宗教が変われば、経済の仕組みも変わる。

プロテスタントが経済の覇権を握るようになる分岐点がルーベンスとフェルメールの時代だ。

### 会計の全体図蔵つかむため世界史を学び直す

もともと世界史の本を書くつもりでなく、会計の全体像について書こうと考えていた。

会計には簿記、決算書の読み方、経営分析、ファイナンスなどの分野があるが、多くの人がどれを選んでいいかわからず、学ぶ目的とのミスマッチが起こるのを見てきたからだ。

とりあえず簿記を学び始める人は多いが、簿記が、なぜ、どこの国で起こったか、歴史的に経緯を理解した方が、勉強が面白くなる、と考えた。

そこで、世界史の中から会計の発展に関係したエピソードを自分なりに整理して物語に纏めてみた。

全体像を示すには簿記の発祥地、イタリアから始める必要があった。

グーテンベルグの印刷機が大発明とされるが、紙の重要性も大きい。

帳簿と言うものができたのは、紙が容易に入手できるようになったからだ。

紙の伝播から個人が聖書を保有するようになり、プロテスタントが現れた。

羊皮紙の時代は、聖書1冊に羊数10頭が必要だった、と言う。

### 経済覇権国の移動とともに出資者も変化

実は、バランスシートから学べば会計はわかりやすい。

バランスシートの基本は、アセット、ライアビリティー、エクイティの3つしかない。

まず、ライアビリティーを銀行から、エクイティーを出資者から調達し、アセットに投資して回していき、うまくいけば、アセットが増える仕組みだ。

このエクイティー部分のオーナーが、経済の覇権国の変遷とともに変化した。

織物業が発展したイタリアでは、出資者が家族から仲間へ、と広がっていく。

この「一緒にパンを食べる」仲間が、カンパニーの語源だ。

家族からの出資ならともかく、仲間から出資してもらおうと帳簿をつけねばならない。

覇権がオランダに移って株主を集めて資金調達するようになると、彼らのために決算書を作る必要がある。

次にイギリスに派遣が移り、産業革命で蒸気汽関車などが作られるようになると、巨大な初期投資を分割計上しようと言う案が生まれる。

これが減価償却だ。

そして、アメリカに派遣が移り、決算書を一般公開する発想が登場する。(ディスクロージャー)

この時、ケネディー大統領の父親であるジョセフ・ケネディーが重要な役割を果たしている。

きわどい取引で巨万の富を築いた彼をSECの初代長官に任命したのはルーズベルトで、インサイダー取引の手口を熟知している彼こそ、それを取り締まるのにふさわしいと考えた。

このケネディー長官時代に、潜在的な株主にまで決算書を公開しろ、と言う投資家保護の概念が生まれた。

こうして自分のためから他人のためへと発展した財務会計に対し、今一度、会計を自分の手に取り戻そうというのが管理会計とファイナンスだ。

近年は新しい動きが始まっている。それがグローバル化だ。

投資に国境がなくなり、日本の会社の株主がアメリカや中国にいることが当たり前になった。

ファンドの存在感も大きくなり、株主と会社、社員と会社の関係も変わっている。

さらに通貨がなくなるなど、今、われわれは変化の真っ只中にいる。

常識から解放されるためリベラル・アーツが重要

会計を会計としてだけ書いていたら、この本はできなかった。私たちは常識の奴隷だが、そこから解放されるためにリベラル・アーツがある。

リベラル・アーツとは文字通り自由になるための技だ。

そのためにはいつもと同じ場所でいつもと同じ人と会うのではなく、違う場所に出かけて勉強したり、時間軸を広くして、歴史から学ばねばならない。

自分が楽しく学ぶことも大事だ。楽しい人が集まる所には良い情報も集まりも生まれる。

世の中がどんな状況であっても、楽しい人と良い情報が行き会う場所を作るのは、成功のカギ――それが歴史の教訓だ。

リベラル・アーツとは、ギリシャ・ローマ時代に理念的な源流を持ち、ヨーロッパの大学制度において中世以降、19世紀後半や20世紀まで、「人が持つ必要がある技芸の基本」と見なされた自由七科のことである。具体的には文法学・修辞学・論理学の3学、および算術・幾何・天文学・音楽の4科のこと。

#### 会計の世界史

(1) イタリアで始まりオランダで花開いた財務会計は、会社所有者の自分のための会計で、過去の記録をするためのものだった（帳簿を作る時代）。

(2) イギリスとアメリカで発展した財務会計は、あくまでも過去の記録ではあるが、他人のため、つまり株主や債権者のためのものもなるようになった（決算書を読む時代）。

(3) それがアメリカで「管理会計」という概念が現れて、会計が再び自分のため（経営分析や経営計画のための）のものとして蘇った（経営計画のための攻めの会計の時代）。

(4) そして現代は、時価評価とキャッシュフローによる企業価値の算出が会計の大きな役割になっている（M&Aなどの投資家のための会計）。